

## 福沢諭吉の理想と三田

三田が生んだ川本幸民は、若き日に蘭学者坪井<sup>つぼいしんどう</sup>信道の塾で緒方<sup>おがたこうあん</sup>洪庵と学び、長じては洪庵の適塾門下の福沢諭吉から厚い信頼を得ました。福沢と川本幸民そして三田との深いつながりは、最後の三田藩主となった九鬼<sup>たかよし</sup>隆義や、そのブレーンであった白洲退蔵(次郎氏の祖父)達と交わされた書簡の数々(「福沢諭吉書簡集」や市史第5巻近代史資料Ⅰに掲載)を通してうかがえます。また「太政官日誌」(当時の官報)に公示されて著名な明治4(1871)年の九鬼隆義上表文(市史第5巻19号資料)は、それらの書簡に示された福沢の先進的な思想を藩政に反映しようとしたものでした。

この上表文は三田の藩知事(藩主)以下、士族全員が大阪府下の八幡屋新田(現在の天保山付近)で農業にいそしみつつ、共に学問に励むことを政府に出願したものです。その趣旨は国の独立は個人の独立の集積であり「貴賤異なりといえども更に懸け隔つることなく」国の独立の責務を負うべきである。そのためには支配される側であった「下タル者」を含めた教育が急務であり、まず三田の士族からその範を示したいというものです。

この考え方の革新性は、それまでの身分制を事実上否定しようとした点にあります。「貴賤異なり」と門地の別を認めた点に限界はありますが、支配にあたる士族とそれ以外の人々という身分の別を否定し、一人一人が隔てなく勤労の傍らで学問にいそしみ、独立した市民となることで立派な国を作り上げようという、のちの民主主義にもつながる斬新な内容です。

この革新的な提案はいったん認可され、実行に移されました。しかし明治5年2月に至って、華族を主体とした身分秩序をもつ中央集権制をめざす政府の方針に合致しないことから差し止めとなり、また廃藩置県によって三田藩自体が消滅したことで幻の政策となりました(市史第6巻2号資料)。天神公園のかたわらに建つ貫誠<sup>かんせいしや</sup>社の碑は、この理想社会実現の試みにいち早く立ち上がった旧藩士達の記念碑です。自立した個人の形成という福沢諭吉が唱えた近代日本の理想は、北摂三田の地において実現されようとしたのでした。



貫誠社記念碑